

水族館業界に入った当初、私はアシカショーチームに配属され、アシカとオットセイの子どもたちを任された。新米のころは毎日のように咬まれた。別に彼らが私に対して新米イジメを仕掛けてきたというわけではない。私が彼らの咬もうとする雰囲気を感じ取れずに、その牙から逃れられなかっただけだ。

アシカ科の各種の顎はなかなか強靱で、立派な牙と歯がそろっている。たいいてい肉食獣の牙は、獲物や敵に食らいついたり、その肉を引き裂くために使われる。しかし、アシカたちの食事は、魚やイカを丸呑みするのが常であり、小さなそれらを捕らえるだけなら歯が並んでいるだけで十分だ。

それなのに強靱な顎と立派な牙があるのは、おそらく仲間同士の会話の道具として使っているからだ。分厚い脂肪に包まれた仲間の身体に牙を立てて「邪魔だあっちへ行け!」と言い、咬まれたほうもやはり牙で「うるさい! そっちこそどけ!」と言い返す。

とくにオス同士はハーレムを奪い合うので、牙の話し合いはかなり激しいものとなる。そしてもちろん、身体が大きく顎と牙が立派なほうが自分の主張を通すことができる。強いほうが勝つなんて野蛮な! と思われるだろうが、ヒトの現代社会でも声が大きく弁の立つほうが勝つのが普通なのだから、まあたいした違いはない。

アシカたちが私を咬むのも、何か気に入らないことがあるときであり、見知らぬ新米と自分のどっちの主張が通るのか試したいのであり、子どものアシカたちにしてみれば、そういう遊びをしてみたいだけなのだ。

そんなわけで、私が気配を察知して牙を躲せるようになり、時に牙が届いたときにも痛そうな顔をせず、お返しに手でパシッと返せるようになったら、対等だと認めてくれるようになった。牙での対話が対等にさえなれば、餌を持っていくこっちの立場が強い。ほどなく咬むこともせず、私の指示に従ってくれるようになった。

当時、その水族館にいたアシカの仲間は3種類で、私が担当していたアシカとオットセイに加えて、オタリアという種類がいた。オタリアは、他の二種に比べると大柄で、少し乱暴で、少し気まぐれで、そして少し知性が高かった。さらにいずれも成長した巨体で、オスの体重は300kgくらいあった。

だからこのオタリアたちに給餌するのは怖かった。もちろん最初は先輩トレーナーとともにオタリアの部屋に入り給餌し、次に先輩に外から見守られながら給餌という手順を踏んだ。そしてついに、初めて単独での給餌を命じられた日のことだっ

た。

給餌を終えて餌バケツの中をオタリアたちに見せる。バケツの中にもう魚が入っていないのを確認すると、みんなプールに戻っていく。……はずだったが、オスが突然300kgの巨体を私に寄せてきたのだ。そして、慌てて「あっちへ行け!」と指示した私の指をパクッと咥えた。ガブリではなくパクッと、牙ではなく短い前歯でだった。

でもあきらかに、もっと強く咬めるぞという彼の意思を感じた。試しに指を引いてみたら、ジワッと圧が強まった。抜けない。

濡れた巨体で壁に押しつけられたまま、指を人質に取られた私は動けずただ途方に暮れた。それから1時間後、次のショーのためにやってきた先輩が餌で誘導してくれたところで、やっと解放された。下着まですっかりびしょ濡れだったが、指に傷はなかった。

やっぱりアシカたちは、咬むことで会話をしてるのだ。しかしあのオタリアは何を言いたかったのだろうか。「今度来るときには、もっと餌を持ってこい」との脅しだったのか? もしかすると「もっと一緒にいたい」と言っていたのか? 真相は今でも謎だ。



中村 元 (なかむらはじめ)

1956年、三重県生まれ。水族館プロデューサー。鳥羽水族館(三重県)を副館長で辞職し独立。新江ノ島水族館(神奈川県)、サンシャイン水族館(東京都)など、国内外十数の水族館リニューアルや新設を手がける。また、北里大学で博物館展示論の教鞭を執っている。東京コミュニケーションアート専門学校名誉教育顧問。全国130を超える水族館を巡り、見どころなどをまとめた『中村元の全国水族館ガイド125』(講談社)など、著書多数。